

『シナール・ハリアン』

——非政党系メディア・グループによる日刊紙の成功——

伊賀司*

近年、メディア業界に起こった大きな変化のうちの1つは、インターネットを通じた新たなメディアが都市部の若年層を中心に受け入れられていったことだった。オンライン・ニュースサイトの分野ではパイオニアとして確固たる地位を築きつつあるマレーシアキニをはじめとして、英語中心のサイトとして、マレーシアインサイダー、ナッツグラフ、マレーシアンミラー、マレー語ではアジェンダ・デイリーやKLポス、中国語ではムルデカレビューなど、多くのサイトが登場している。また、昨年（2008年）の総選挙に前後して、ブログの政治・社会的な影響力も高まりつつある¹。

では、このようにインターネットが近年注目される一方で、印刷メディアはどうなっているのだろうか。筆者は、近年、印刷メディアにおいても変化が起こりつつあると考えている。そうした変化は、マレーシア観察者の間では、華字紙や英字紙と比べ相対的に政府寄りの立場が強いと言われるマレー語日刊紙においても垣間見ることができる。その例として、本稿では、日刊紙『シナール・ハリアン』とそれを刊行するカラクラフ・グループについて紹介しよう。

『シナール・ハリアン』

マレー語紙日刊紙においては、『ウトゥサン・マレーシア』を刊行するウトゥサン・グループと『ブリタ・ハリアン』を刊行するNSTPグループが長年にわたり業界を独占してきた。しかし、近年、両グループの独占に挑戦する日刊紙が現れている。カラクラフ・グループの『シナール・ハリアン』で

ある。

『シナール・ハリアン』は、2006年、半島部東海岸のクランタン・トレンガヌ州限定で刊行された後、販売網を広げ、現在ではジョホール州を除く半島部の全州をカバーするようになった。それにつれて発行部数も急拡大し、現在では多い時で20万部弱の部数がある。これは、（日曜版を除く）『ウトゥサン・マレーシア』と『ブリタ・ハリアン』の部数をほぼ射程圏内に収めていることになる²。長期低落傾向にある2紙と比べ、3年程度で『シナール・ハリアン』が急成長したのは幾つかの要因がある。

まず、マレー語紙業界の中では革命的ともいえる紙面の作り方がある。現在、『シナール・ハリアン』には州毎の7バージョン（スランゴール・KL、クランタン、トレンガヌ、パハン、マラッカ・ヌグリシンピラン、ペラ、北部〔ペナン・クダ・プルリス〕）がある。共通のナショナル・セクションを除くと、徹底したコミュニティ・ベースのニュースから構成され、すべてのバージョンで紙面が異なる。紙面は州の下位行政区分にあたる郡（Daerah）ごとに毎日最低1頁が割り当てられている。

この郡ごとの頁を作る際の取材・編集体制は完全に組織化されている。取材については、郡ごとにSkwad Caknaと呼ばれる担当記者が割り当てられ、紙面の上部に名前、顔写真と携帯番号までが記されている。この郡担当記者が会社から提供された『シナール・ハリアン』のステッカー付きの車で郡内をくまなく回って情報を収集

* 神戸大学博士課程在籍。igatsukasa@gmail.com

² ABCの2008年のデータでは『ウトゥサン・マレーシア』の発行部数が19万7952部、『ブリタ・ハリアン』が19万2982部である。

¹ マレーシアのインターネットについては筆者のJAMS Newの一連の投稿を参照していただきたい。

する。

一方、編集体制について言えば、各州のトップの編集者は通常本社のシャー・アラムにおり、彼らと編集長が朝と夕方 2 回の会議で Skuad Cakna に郡内のどの事件やイベントの取材を割り当てるか決定し、それをオンラインで伝える。各 Skuad Cakna は取材後、オンラインを通じて記事を本社に送る。

因みに、華字紙には伝統的にコミュニティ・ベース情報が多くみられるが、上記の取材・編集体制に見られるように『シナール・ハリアン』は華字紙以上に組織化され、徹底したコミュニティ情報の提供をおこなっていると言えよう。そのため、ほぼ毎日、7 つのバージョンごとに新聞の第一面さえも異なっているのである。

こうした徹底したコミュニティ・ベースの紙面づくりに加えて、『シナール・ハリアン』が読者に急速に受け入れられているのは、その独立した報道姿勢にある。他紙は与党寄りの報道が多いが、『シナール・ハリアン』は与野党をなるべく公平に扱う紙面づくりを行っている。因みに、カラクラフ・グループ編集長のジャリル・アリによれば、紙面に占める野党の割合が多すぎるという理由で、昨年には内務省に呼び出されたこともあったが、現在でも独立した編集方針は全く変わっていないという。

カラクラフ・グループ

『シナール・ハリアン』が政治的に独立した編集方針を貫けるのは、出版元であるカラクラフ・グループが政党と繋がっていない、唯一のプミプトラ系のメディア・グループであることが最大の要因であろう。カラクラフ・グループはクランタン生まれのビジネスマンのフサヌディン・ヤコブによって 1978 年に設立された。カラクラフは最初期には子供向けの書籍出版から始まり、その後、女

性雑誌『ミングアン・ワニタ』や青年向け週刊紙『バチャリア』、育児雑誌の『パ・アンド・マ』など 2009 年 8 月現在で 29 もの新聞・雑誌を発刊するようになっている。

その 30 年余りにわたる創業史の中で、カラクラフは政府によって新聞の(一時)停刊を余儀なくされたこともある。マレーシアの政治史の中で必ず言及される、1987 年のオペラシ・ララン事件とその後の新聞 3 紙の停刊事件では、カラクラフは停刊されたマレー語紙の『ワタン』の発行元であった。また、1999 年のレフォルマシ運動の最盛期にカラクラフは『エクスクルーシフ』を創刊したが、翌年に政府が出版ライセンスの更新を認めなかったために、『エクスクルーシフ』は僅か 1 年だけしか生き残れなかった。また、上記の政治系 2 紙の他にも、掲載された写真がモラルに抵触するとして『バチャリア』が一時停刊されたこともある。

以上のような政府からの圧力にもかかわらず、これまでカラクラフ・グループがなぜ急速に発展できたのかを筆者が尋ねたところ、グループ編集長のジャリル・アリは幾つかの回答の最後に、創業者社長のフサヌディンの出版事業への情熱とアイデア、一方で我々(ジャーナリスト)が当然の仕事を実績にやってきた結果であろうと答えている。

筆者が指摘したいのは、マレーシアのメディア、特に印刷メディアの発展には政府の対応が大きな鍵を握っている一方で、『シナール・ハリアン』の成功に見られるように、革新的なアイデアや独立した経営基盤を持ったメディアには成功の可能性が依然として残されている点である。それは、必ずしも高くはないのかも知れない。ただ、近年、間違いなくその可能性はネット空間の外にも徐々に広がりつつある。